



TITLE:

静脩 Vol. 7 No. 2 (1970.7) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 7 No. 2 (1970.7) [全文]. 静脩 1970, 7(2)

ISSUE DATE:

1970-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65937>

RIGHT:

図 書 業 務 放 談

保 田 清

本学を卒業して以来35年目になるが、その間ほとんど本学の文献だけで研究・教育に従事して来た私には、本学の図書業務について種々の希望があるが、その中で図書購入に要する日時を何とか短縮出来ないものかと深刻に考えている。殊に教養部に移って、教室の図書購入に直接携わってからは、一層その必要を如実に痛感した。具体的なデータもない事はないが、それを挙げることは差し控えて、とにかく少々の会計法規違反を犯したとしても追いつけそうもない位である。

勿論これは洋書を主としての話だが、和書とても楽観はできないようだ。例えば学生諸君の購入希望書も、近刊書の場合は大抵購入手続中のものであることが多い。尤も学生用にせよ研究用にせよ、国民の税金で賄われ、大学の蔵書として孫子の代まで残るものなのだから、本学の教育・研究の責任者である教官が、購入すべき図書か否かを慎重に考慮すべきで、従ってその決定に多少の日時を要するだろうが、問題はその後、利用できる状態になる迄の日数——いや月数？——である。

戦前のノンビリ・ムードや戦中の麻痺時代や戦後の混乱期はさて置いて、図書の登録・支払、目録・分類、カード挿入など、重要な基礎的作業を果たすのに時間がかかるのは当然だが、そこに工夫の余地が果してないだろうか。例えば目録と分類とを同じ人がすれば、その図書の内容を考えるのに二度手間にならない筈である。一体、わが国のライブラリアンの大きな欠点は、極めて少数の人を除いて、図書の内容について知らなさ過ぎる事ではなかろうか。嘗てカントの邦訳をどの項目に分類すべきかと一司書から相談を受けた事がある。彼が持参した分類表を見ると、「先驗哲学」という項目があるではないか。その彼も今では或掛長になっている。

そこで私は目録・分類をすべて夫々の部局で行ない、その研究室の援助を願って、司書能力を向上させねばなるまいと思う。これは何年もかけないと有効でないから、速かに始めるべきである。こうしてレベル・アップするなら、附属図書館は目録に費す労も省け、保存と総合との機能に専心出来るだろう。尤も全学的な意義がありかつ高価な図書だけは、その申出を受けて選択・決定する全学的な教官の組織を制度化した上で、この購入・目録・分類を直接行なわねばならない。

どうも図書館学の講習をいくら受けても、現場での教育がなければ、大学図書館員として有能な人材は得られないようだ。購入・目録分類・出納など何れの仕事をするにしても、こ

のような教育を受けて図書の内容が多少とも分る人が当るようになる迄は、必要な文献を教官自身が書架から取り出すのでないと、研究・教育の能率低下を免れ難い事は明白である。然し他方、ベテラン司書には、行政上のランクとは別に、能力ランクを設けて、給与の面でも仕事の面でも、相応の礼遇を与える事を考えるべきであろう。(教養部教授)

——— 会 議

図 書 館 商 議 会 専 門 委 員 会

第6回：昭和45年5月27日（水） 第7回：昭和45年6月24日（水）

〔第6回〕 テーマ：部局図書館のあり方について

前回に引きつづき、部局図書館のあり方について検討したが、部局図書館のあり方も、結局は京都大学全体の図書館システムの中でとらえるべきだということから、事務部より、京都大学のライブラリ・システムに関する試案が出され、それについて討議された。

この試案では、京都大学の全図書館を、中央図書館と専門図書館および学習図書館の3つにわけ、専門図書館の機能は、現在の部局図書館が担当するが、ただ現在のままで担当するのではなく、可能なばあいは、専門分野の近いものは、部局のわくを越えてまとめることも必要であることが指摘された。

しかし、部局図書館が専門図書館の機能を受持つというばあいは、中央図書館は具体的にどのような機能を果すべきかが問題となり、次回はさらに、中央図書館の機能を検討することになった。

〔第7回〕 テーマ：中央図書館のあり方について

前回の討論により、中央図書館の果す役割について、さらに詳細に分析された案が、事務部より提出され、それを中心に討論が行なわれた。

前回の案では、中央図書館の役割として、㉔. 事務センター、㉕. 情報センター、㉖. 教養センター、㉗. 保存センターの4つがあげられ、学習図書館の機能が除かれていたが、今回はそれをさらに若干訂正して、㉔. 管理センター、㉕. 情報センター、㉖. 学習・教養センター、㉗. 保存センターの4つの機能を持つとする案が提出された。

ここでとくに論議が集中したのは、中央図書館が学習図書館の機能を持つべきかどうかという点であったが、この問題については、今後さらに検討を続けることになった。

大 学 図 書 館 改 革 問 題 懇 談 会

第7回：昭和45年5月8日（金） 第8回：昭和45年5月22日（金）

第9回：昭和45年6月5日（金） 第10回：昭和45年6月19日（金）

〔第7・8回〕 テーマ：学部改革と学部図書室との関係について

主として、学部図書室が、今後の学部改革——大学改革にどのようにかわるのか、現状はどこが不都合なのかということが、各学部よりの報告を中心に話し合われた。多くの学部では、教育と研究の改革が語られる際に、まだ図書館（室）が重要な問題として捉えられていないこと、例えば、学部の改革について比較的早くから討論されてきたといわれる理学部においてさえも、学部学生が三つの系に分けられることが討議されながら、学生の学習にたちまち密接な関係をもつはずの図書室が、その変化にどう応じてゆくのかという点は、十分

に話されたとはいえなかったということなどが議論された。

この両回を通じて少なくとも、今後あらゆる部局で学生の学習・教育の制度を変革しようという時には、当然、その重要な部分として、図書館サービスの基本事項が十分討議されるべきであるということが確認された。

〔第9回〕 テーマ：図書館への電子計算機導入について

この回も部局図書室に関する討論からはじめられたが、たまたま附属図書館で閲覧統計や、受入業務などに電算機を導入する計画がいよいよ現実の日程にのせられはじめたことが注意をひき、参加者の多くが図書館と電算機の関係についてまだ認識のうすいことから、この問題の質疑で終始した。

大学図書館の戦後の歴史を見ると、光学系の機械化（マイクロフィルム、ゼロックス等）を他のどの部署よりも早くとり入れてきたが、それは利用者へのサービス向上から考えて、たしかに一定の成果があったと認められる。

しかし、近い将来に予定される電子系の機械化は学生、教官へのサービス向上と、職員の労働過重を軽減するということが第一に考えられたものなのか、これだけ大きな資本の投下を必要とする事業が果してどういう意味で推進されているのか、また、電算機導入後の図書館員はどういう役割をはたすことになるのか、という点に討論が集中し、今後十分注目するべきであることが話し合われた。

〔第10回〕 テーマ：附属図書館事務部試案『京都大学のライブラリ・システム』について

今回は5月27日の図書館専門委員会で検討された標記『システム』について話しあった。

コンピューター導入によって、附属図書館は、①事務センターとして受入事務・閲覧統計などの全学の一括処理を行ない、②情報センターとして全学総合目録その他二次資料の整備・拡充・多角的活用をはかり、③教養センターとして学生の人格形成に必要な教養図書・視聴覚資料の拡充につとめ、④保存センターとして全学の図書資料・書庫スペース利用の有効化をはかる。この附属図書館の機能変革にこたえて、部局図書室のほうは従来の研究図書館機能に加えて学習図書館機能を分担し、学生への奉仕範囲の拡充にあたる。———というこの『システム』の構想にたいして、全学の利用者は具体的にどのような恩恵をうけることになるのか、部局図書室側は現在の定員でサービス向上に耐えられるのか、またその定員配分はどのようになるのか、などの意見が出された。その他にこの構想の成否は導入されるコンピューターの活用如何にかかわっているという発言もあった。

○ 国立七大学附属図書館協議会 ——第44次——

〈とき：5月20日 ところ：京都御事会館〉

本年度のテーマは、①図書館業務の機械化、②図書館報発行の目的・意義、③図書選択に対する学生の要求、④大学における図書館長の地位、⑤図書専門職員の人事交流および処遇、⑥国大協図書館特別委員会の中間報告、⑦中央図書館の機能改革、⑧七大学附属図書館の地区情報センターとしての体制強化についてであった。

時間の制約のため、おおむね討論はつまこみ不足であったといえるが、この中、機械化についてはコンピューター導入が中心に、館長の地位については主に評議員であるかどうかをめぐって話し合われた。図書専門職員試験の上級職合格者の処遇については、管理能力育成のために一般職への一定期間の配置換えや他大学との人事交流も考慮せねばならぬという主張がみられた。

学内・他大学広報誌のリスト 《附属図書館収集》

——改革の動きを如実に知るために——

これからの大学改革には、学内や他大学で進行中のその動きをよくとらえ、これを参考にしていくことが、きわめて大事と考えられます。附属図書館参考掛のカウンターに常置していますから、ぜひのご利用をねがいます。なお、これら広報誌の昨年のものには、大学紛争の生々しい記録も収載されています。

凡例

・誌名に部局名・大学名のないものは「」でそれを補記した。

・所蔵号数欄に使用した記号は次のとおりである。

—=継続 +=以後継続備付 () =発行の年月日 (1970年7月10日現在)

誌名	編纂者または発行者	所蔵	号数	備考
学内				
京大	京都大学広報委員会	1 (1969. 5. 20) -38 (1970. 7. 3) +		
文部	文部省	1 (1969. 3. 17) -10 (1970. 4. 13) +		
法学部	法学部	1 (1969. 9. 21)		
法学部	法学部	1 (1969. 12. 16)		
法学部	法学部	1 (1969. 4. 10) -20 (1970. 6. 30) +		
法学部	法学部	1 (1969. 9. 16) -9 (1970. 6. 17) +	6, 8欠	
法学部	法学部	1 (1969. 4. 24) -16 (1970. 2. 7) +	1欠	
工学部	工学部	21 (1969. 9. 20) -31 (1970. 7. 5) +		
京大	同委員会	1 (1964. 9. 15) -32 (1970. 5. 15) +		
他大				
北海道大学	北海道大学広報委員会	1 (1969. 6. 3) -21 (1970. 3. 26) +		付・同資料
東北大学	東北大学広報委員会	1 (1969. 11. 10) -16 (1970. 6. 30) +		
同編纂委員会	同編纂委員会	1 (1969. 7. 1) -20 (1970. 3. 20) +		
東京大学	東京大学広報委員会	44 (1969. 10. 6) -78 (1970. 6. 19) +		付・東京大学弘報委員会「資料」1968.10→1969. 3
東京大学	東京大学広報委員会	1 (1969. 12. 15) -7 (1970. 6. 2) +		
東京工業大学	東京工業大学広報室	1 (1969. 4. 14) -16 (1970. 3. 31)		
同志社大学	同志社大学総務部	1 (1968. 5. 1) -32 (1970. 6. 20) +		付・別冊「1969年度記録」
同志社大学	同志社大学総務部	1 (1968. 6. 24) -42 (1970. 6. 18) +		
大阪大学	大阪大学広報委員会	1 (1969. 2. 12) -39 (1970. 2. 4) +		
神戸大学	神戸大学広報委員会	1 (1969. 4. 10) -66 (1970. 7. 7) +		付・同資料
広島大学	広島大学広報委員会	1 (1969. 6. 25) -32 (1970. 6. 15) +		付・同資料
九州大学	九州大学広報委員会	1 (1969. 9. 29) -63 (1970. 6. 29) +	57, 60欠	

一言・ふたこと

現在の大学図書館が色々な意味で改革される必要がある。というのは、誰も異論がなからう。とりわけ教養部図書館などは、明治30年の建築で、トイレもくみとり式、封鎖の時はバキューム・カーが入れなくて、職組支部に話が持ちこまれたこともある。近く新築されるという話が持ちあがっているが、そのこと自体は喜ばしいことである。

もっとも、「改革」が単に建物・設備の問題にとどまらぬことは言うまでもないことで、何を基準にして改革が行なわれたらよいか、この際みんなで考える必要がある。というのは、現在、口を開けば「合理化」「近代化」が語られるが、図書館を「近代化」「合理化」することが、文部省や当局の管理運営を能率的にするのを主眼に行なわれるなら、それは

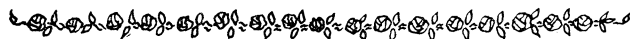
「改革」とは？

田 中 礼

本当の意味での改革とは言えまい。いわゆる「中教審路線」が大学の自治・学問の自由に暗い影を投げかけている今日、改革にあたっては、何よりも、学生の要求、研究者の便宜、図書館員の希望、勤務条件などの問題が基本にすえられなくてはならないだろう。

教養部について言えば、研究・教育機関としての教養部の任務に本当に応え得る図書館とはどういうものか、ということが、みんなで考えられなくてはならない。管理運営・教育・研究をバラバラに切りはなす動きが色々なところに出てきているが、教養部図書館がそういう動きにまきこまれないよう、教養部の一員として見守りたく思っている。

(教養部・助教授)



そもそもこの文章を書く羽目になったのは現在、音楽研究会がBOXとして使用している新徳館を新しい図書館に建て直すという話を聞き、それはわれわれ音研の者にとってはたいへんだと、図書館へ聞いてみたら「それについては知らない」とのことで、逆に何か書いて欲しいと頼まれたわけです。現在の木造平屋の図書館は本こそ10万冊を超えるということですが、やはり図書館というにはあまりにお粗末です。教養部の学生数からいって実際に利用する人の数はほんとに少ないと思いますが、それも設備の点からいえば当然かもしれません。昼休みなどすわる場所もないというのではあまり利用する気にもならないのでは。また建

教養部図書室について

Y. K.

物全体も、もっと明るいものでなかったらとても本を読んだり勉強するムードではないように思います。でも中には今の建物のなんとなく田舎びたところをよいと思う人がいるかもしれません。

それから現在の図書利用のシステムについていえば、1冊を1週間では不便であり、検討すべきです。冊数と期間を改善すればもっと利用がふえると思います。でも、どうやら教養部の新しい図書館ができるらしいので、設備とシステムの両面でよいもののできることを期待します。

(教養部2回生・農学部)

(掛)(よ)(り) 同じ図書の所蔵冊数が少いの、特定の図書に多数の閲覧希望者が集中することが多いので、貸出しを1冊1週間としてきました。しかし差支えが起らない時は、手続を更新して借りつぎすることも出来ます。なお、多数の図書を同時に貸すよりは、1冊ずつ貸す方が、読書効率が大きいことも考慮しました。この現在の制度は随分以前から施行していますが、特にお困りの場合は、図書委員会へ申出てください。

昭和44年度 京都大学 増加図書統計

(累計は昭和45年3月末現在)

部局別	計 別 種 別	増 加 数			果 計		
		和 書 冊	洋 書 冊	合 計 冊	和 書 冊	洋 書 冊	合 計 冊
図 書 館		5,991	609	6,600	297,453	134,486	431,939
文 学 部		3,913	3,554	7,467	330,085	181,715	511,800
教 育 学 部		1,737	1,298	3,035	21,620	22,711	44,331
法 学 部		4,002	6,257	10,259	144,282	205,131	349,413
経 済 学 部		3,085	2,605	5,690	121,084	134,546	255,630
理 学 部		865	4,599	5,464	26,608	132,541	159,149
医 学 部		440	1,791	2,231	24,513	66,897	91,410
病 院		154	247	401	9,159	19,727	28,886
薬 学 部		140	535	675	5,547	8,046	13,593
工 学 部		3,215	7,410	10,625	75,261	129,050	204,311
農 学 部		4,046	3,438	7,484	108,970	102,886	211,856
農 場		18	3	21	972	96	1,068
演 習 林		223	36	259	3,642	1,777	5,419
教 養 部		5,883	6,012	11,895	124,759	87,932	212,691
化 学 研 究 所		179	1,016	1,195	5,437	14,120	19,557
人文科学研究所		11,522	1,664	13,186	248,031	25,297	273,328
結 核 研 究 所		67	189	256	962	1,428	2,390
工 学 研 究 所		167	340	507	2,234	3,827	6,061
木 材 研 究 所		176	304	480	3,035	2,282	5,317
食糧科学研究所		269	967	1,236	2,155	3,252	5,407
防 災 研 究 所		349	620	969	3,616	4,897	8,513
ウイルス研究所		6	564	570	138	1,446	1,584
経 済 研 究 所		1,175	746	1,921	11,247	5,938	17,185
基礎物理学研究所		114	1,018	1,132	1,676	12,761	14,437
数理解析研究所		207	3,664	3,871	1,477	18,980	20,457
原子炉実験所		513	1,352	1,865	4,045	8,146	12,191
霊長類研究所		118	221	339	198	290	488
東南アジア研究センター		324	1,198	1,522	586	2,930	3,516
大型計算機センター		3	79	82	16	118	134
経 理 部		304	12	316	3,850	239	4,089
施 設 部		3		3	733	58	791
合 計		49,208	52,348	101,556	1,583,391	1,333,550	2,916,941
金 額		80,796,794	282,686,653	363,483,447			

あとがき：大学改革は、これからいよいよ落ち着いて息長くとりくんでゆくべき時になったと思います。そのためのご参考として、資料紹介欄に「学内・他大学広報誌のリスト」を掲載いたしました。また本号には教養部のかたのご意見を集めるようにつとめました。今後とも自由な個人の立場にたつての、「静脩」紙面での活発な意見の交流を期待しております。投稿歓迎。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 7, No. 2 (通号33号) 1970年7月15日発行・編集発行人：
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220～2238